第 81 回公開シンポジウム

豊かな学力を育む教育のあり方

◆プレゼンター　田　中　耕　治
京都大学大学院教育学研究科教授／教育方法学・教育評価論

◆パネリスト　山　下　晃　一
神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授／教育制度論

◆司　　会　一　色　伸　夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 81 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日のテーマは「豊かな学力を育む教育のあり方」ということで、教育の問題を考えていきたいと思います。学習指導要領が改訂され、昨年度から小学校、今年度から中学校において、全面実施されています。今回の学習指導要領では、およそ 25 年ぶりに訪れた教育課程の大きな改革が目指されています。学生指導要領改訂の背景、改訂の主旨を踏まえながら、未来に生きる子どもたちとって必要な学力とは何か、それを育む教育のあり方を考えます。

まず、基調講演は、田中耕治先生です。田中先生は、京都大学大学院教育学研究科教授で、ご略歴を簡単に申し上げますと、京都大学大学院教育学研究科の博士課程を修了の後、大阪経済大学と兵庫教育大学を経て 2002 年から京都大学大学院教育学研究科の教授になられました。ご専門は教育方法学、教育評価論です。教育方法学の立場から、学力と評価の問題をご研究されています。

そして、パネリストとして神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授の山下晃一先生にお越しいただきました。山下先生も、京都大学大学院教育学研究科を卒業されて、和歌山大学を経て、神戸大学にいらっしゃいます。ご専門は、教育制度論、教育行政学、学校経営論で、今日は、学校の問題、そこでどのような学びがなされているのか、その辺りをお二人の先生の話を踏まえて、皆さんと考えていきたいと思います。では、田中先生、基調講演をよろしくお願いします。

田中：皆さん、こんにちは。今ご紹介に預かりました京都大学の田中です。今日は、子ども学の講演会にお招きいただきました。一色先生からお話をいただき、子ども学の講演会が長い歴史と伝統のある講演会であるということを知り、この講演会にお招きいただき、本当に光栄に思っております。

私は、教育方法学、教育評価を勉強しております。教育方法学という学問は、一言で学問の性格を説明すると、とりわけ学校の先生たちへ向けての応援歌を発するという学問ではないかと思っています。その教育方法学をもう少しパワーアップするために、教育評価にメスをいれて、教育方法論を考えないといけないと思い、勉強してきました。今日は、「豊かな学力を育む教育のあり方」をテーマにお話し

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ていきます。お手元にレジュメがありますので、その順番でお話していきます。

まず、一色先生の方からお話がありましたが、去年は小学校、今年は中学校、そして高校の理数系が一部入りますが、学校で学ぶ教育の内容が 25 年ぶりに大きく変わりました。そして今、小学校、中学校の先生方は、新しく変わった教育内容をどのように教えたらいいのかと、毎日ご苦労されています。どのように変わったかは、これからお話していきますが、私の手元に少し懐かしい教科書を持ってきました。これは、小学校２年生で使っている教科書です。この教科書は、教科書会社の名前は言えませんが、日本では一番たくさん使われている教科書です。この右側に持っているのが古い教科書で、左側に持っていますのが去年から使われ始めた新しい教科書です。このように並べると、あまり変わらないのではないかと思われるかもしれません。版も一緒だし、厚さも一緒ですが、ページ数を見てみると、古い方は 95 ページなのですが、新しいのは 126 ページあります。30 ページ多いことになります。このお見せしている教科書は下巻ですから、上下巻合わせて 60 ページぐらい増えたのです。これは、先ほど言いましたように、日本の学校の中で何を教えるかという教育内容のことを考える時に、学習指導要領が変わり、その変化は大体 25 年の周期で変わっているのですが、その大転換をした象徴が教科書のページ数がとても増えたことに表れているのではないかと思います。今日は、なぜ増えたのか、増えたということをどう見るのかということをお話したいと思います。

講演のレジュメに学力をめぐる情勢とあります。なぜ、こんなにもページ数が増えたのか、その社会的な情勢をまとめています。今から 10 年以上前の 1999 年、皆さんはまだ小学生の頃だと思いますが、日本で面白い本が出ました。それは、『分数ができない大学生』というものでした。私は、そのテーマを見てびっくりしましたし、私以上に当時の日本の保護者たちはびっくりしたのです。その大学生ができなかったという分数も難しいものではなくて、異分母分数の足し算、引き算ができないという程度の内容でした。その本が出てから以降、どうも最近の子どもは読み書き算の学力が弱くなっているのではないかということが問題になり、学力低下が起こっているのではないかと大騒ぎになりました。この原因はどこにあるのか。それは、当時の教育のあり方を規定していた「ゆとり」の学習指導要領にあると指摘されるようになります。皆さん方は、「ゆとり」世代と言われたことがあると思いますが、どうもその「ゆとり」という言葉が、勉強をしなくてもいいのだというメッセージを学校に与えて、だから最近の子どもは勉強をしなくなった、その典型が大学生になっても分数の計算ができないのだと言われたのです。それから 2・3 年ほど、ニュースやテレビ番組、さまざまな本などで騒ぎ立てました。

それが少し落ち着いた頃に、これで静かになるかと思っていたのですが、今回は、学力についての第二弾の大きな波がやってきました。これが、PISA 調査というもので、皆さん方も授業で PISA のことをお聞きになったかもしれません。これは、世界規模で行われている学力の調査で、OECD が主体となって、所謂世界の先進国と言われている国々の高校１年生を対象とする調査です。この調査は 2000 年から始め、３年毎に実施され現代も続いています。2000 年、2003 年、2006 年、2009 年とあり、今年は 2012 年調査があります。最初にあたる 2000 年の第一回調査の時は、日本ではあまり騒がなかったのです。なぜかというと、日本の子どもの学力の水準が高かったので、あまり問題にしなかった。それが、2003 年の調査の時に、日本の子どもの読解力（所謂リーディング・リテラシー）が芳しくなかっ

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

たのです。それで、当時の文部科学省は驚き、いわゆる読み書き算の学力の低下に加えて、高校1年生の読解力まで低いことが明らかになるなかで、今回の学習指導要領の改訂に繋がっていきます。

では、その PISA はどのような学力を測ろうとしているのでしょうか。このことが今日のテーマである「豊かな学力」の中身に関わることです。日本では、学力という言葉を使いますが、PISA はリテラシーという言葉を使います。この PISA のリテラシーはどういう内容なのか。簡潔に言うと、「子どもたちが現実の世界、実際の生活の中で実際に活きて働くような学力」ということです。つまり、勉強したことをずっと覚えて貯め込んでいるだけではなくて、それが実際の世界の中で使えるような学力ということです。それが日本では「活用する力」と言われるようになりました。この「活用する力」が芳しくなく、学力の実態を精査しようとして、文部科学省は 2007 年から全国学力・学習状況調査を実施します。たぶん皆さんが中学３年生の頃に受けられたのではないかと思います。その問題の作り方が面白い。A 問題、B 問題を作り、A 問題は基礎的な学力を測る、でも B 問題は、PISA の中で出たような問題を念頭において、それを作り直したような問題を作成しました。そして、その調査結果を踏まえて、2008 年に学習指導要領が改訂され、それに準拠して教科書が変わりました。

学習指導要領が変わると、指導要録が変わります。指導要録というのは、評価をする時の枠組みを示しており、通知表や内申書の原簿になるものです。私は、この指導要録というものはかなり重要であると思っています。皆さんは、小学校、中学校と学校生活を過ごしてきた中で、その先生が何を教えてくれたのかも重要だが、その先生がどのような試験をするのか、そしてどのようにして成績をつけるのかもかなり気になっていたと思います。実のところ、その成績をつける枠組みを指導要録が示しているのです。今回の 2010 年改訂指導要録は、前回の 2001 年改訂の指導要録と比較すると、学力評価の観点である「表現」という言葉の位置づけが変わりました。今までは「技能･表現」となっていたのが、「思考・判断・表現」となったのです。これは、「表現」という観点を重視する表れです。「技能・表現」ですと、例えばグラフを正確に描けるか、実験結果を表にできるかというような技能を表現することでした。今回は、思考とか判断を表現すること、つまり、いろいろ考えたり、また推理をしたり、問題解決したことをきちんと表現することができるかという点を評価しようとしているのです。ここにも PISA の影響を見ることができます。さらに、表現をどのように評価するのかという点について、特にパフォーマンス評価を重視しようとしています。したがって、現在、パフォーマンス評価という新しい評価の考え方に注目が集まろうとしています。

以上、これまでの情勢を振り返りました。それでは、本論であります、「豊かな学力」とは何かを考えていきましょう。私は、学力を見る時に、２つの側面があると思っています。一つは、学力の内容。例えば社会科で三権分立を教えるという授業で申しますと、三権分立が学力の内容です。そして、もう一つの側面は、三権分立を教えた時に、子どもたちにどのような理解力とか能力を求めるかです。皆さんが小学校の先生になったとして、教えた子どもたちが三権分立をわかっているかどうかを調べてみたいと思った時に、どのような問題を作りますか。よくあるのは、「三権分立とは何ですか」と聞くことです。そうすると、司法、立法、行政と答えます。さて、この子どもは、司法、立法、行政という言葉を暗唱しているわけですが、本当に三権分立がわかっていると言えるでしょうか。私の知人の先生は、司

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

法、立法、行政と言えるのも重要だけれども、三権分立がなかった時代と三権分立が作られた時代の違いをきちんと説明できるかどうか。その説明ができた子どもは三権分立がわかっていると考えたいとおっしゃいます。そうすると、三権分立を教える場合、どういう能力を子どもたちに求めるかという側面も大切になってきます。それによって、授業や評価の方法も変わってくるからです。

この学力における能力の問題について、学力を研究する人たちは、「学力モデル」の課題と言ってきました。この学力モデルの研究を思い切って総括しますと、学力には3つの側面がきちんと含まれていることであり、それこそが「豊かな学力」であると考えます。レジュメでは、それを「学力の基本性」と「学力の発展性」と「学力の総合性」という言葉で表しています。最近の文部科学省の言葉でいうと、学力の基本性は習得という言葉で、学力の発展性は活用という言葉で、学力の総合性は探究という言葉で表しています。具体的に考えてみましょう。

学力の基本性で一番重要なことは、「わかることとできること」、少し難しく言うと、「概念的知識と手続き的知識」が統合していることです。たとえば、資料1にあります平行四辺形の面積問題を見てください。これは、先ほど申しました日本の全国学力・学習状況調査の中で出された問題です。（1）の問題はA問題、学力の基本性を測る問題、（3）は学力の発展性、学力の活用を見ようということで出された問題です。（1）の問題は、平行四辺形の面積を出しなさいとあります。これは、正答率は96%です。次に、下の（3）の問題は、右側の東公園と中央公園の面積のどちらが広いかということを尋ねている問題です。この問題ですぐにわかるのは、東公園は、縦が100メートルで横が110メートルの長方形ですので、縦×横で掛け算すると面積が出ます。中央公園は平行四辺形ですので、（1）の問題を多くの児童が解けているので、この問題も解けそうですが、正答率は18.2%に落ちます。とくに、平行四辺形の面積については34.4%の誤答率でした。その理由は、（3）には平行四辺形の斜辺の長さが示されていて、そのために混乱が生じたのだと思います。つまりは、斜辺が入ると解けないということは、平行四辺形の面積は「斜辺ではなくて、なぜ高さで計算しなければならないのか」という概念的知識が身に付いていないからです。

先ほど説明しましたように、10年前に日本の子どもたちの学力が低くなっていることが指摘されました。その結果、教育現場の中には、もっと教え込もう、もっと訓練（ドリル）をして教育した方がいいのではないかという考え方や主張が出されました。私は、あることを身に付けるために訓練をし、繰り返し勉強をすることも大切だと思いますが、そこには明らかな限界があることも知っておくべきでしょう。訓練で身に付くのは手続き的知識であって、概念的知識を育成するためには子どもたちが納得のいく丁寧な指導が求められるのです。そして、このように「概念的知識と手続き的知識」を統合することによって、その学力の基本性は発展性に転化していくのです。

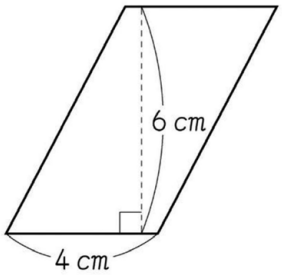
次に学力の発展性です。私は、PISAが問題にしているようなリテラシーとか「活用する力」と日本の中で「応用する力」として考えてきたことが、どのように同じで、どのように違うのかを分析してきました。結論を先に申しますと、日本の私たちが「応用」と言っていたものと今国際的なところで「活用」と言われていることは、かなりの部分で重なっています。ただ、「活用」にはプラスアルファの違いがあり、そこのところがこれからの日本の学校教育の課題になっていくのではないかと思います。では、従来の

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

2007 年度　小学校算数 A 問題（上）
2007 年度　小学校算数 B 問題（下）　　**資料 1**

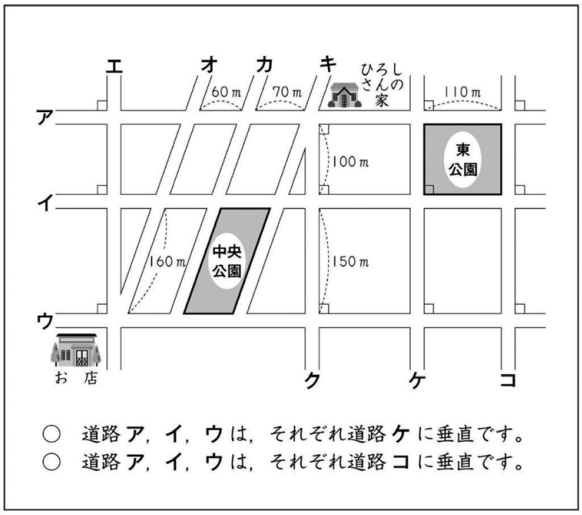
次の図形の面積を求める式と答えを書きましょう。

(1)　平行四辺形



正答率　96.0%

(3)　ひろしさんの家の近くに東公園があります。
東公園の面積と中央公園の面積では，どちらのほうが広いですか。
答えを書きましょう。また，そのわけを，言葉や式などを使って書きましょう。　　正答率　18.2%



平行四辺形の面積の誤答　34.4%

「応用」とは何か。これは、「学び直し」と「まとめ直し」をしていることだと思います。先ほどの平行四辺形の問題を見てもわかるように、あの（3）の問題を解くことで、子どもたちは、「平行四辺形って底辺×高さであって、斜辺×高さではないのだ」ということを学び直すのです。また、まとめ直しとは、

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

平行四辺形、長方形といろいろな図形の違いをまとめ直しているのです。このような課題を与えるのが従来の応用問題だったのです。これに加えて「活用」においては、大きくは2つのプラスアルファがあります。一つは「メタ認知」、もう一つは、「クリティカルな知」です。そして、それらを表現していく、コミュニケートしていくことが、特にこれからの子どもたちに求められている力として今回「活用」として定義されているのではないかと思います。

では、そのメタ認知とは何か。皆さんの中には、講義などでこの言葉を教えてもらっているかもしれません。先ほどの平行四辺形の問題でいうと、どちらが広いかという問題を出しています。そして、その中で「また、そのわけを言葉や式などを使って書きましょう」とあります。正解は東公園ですが、それだけ書いただけでは駄目なんです。どうしてそのように考えたのかを言葉や式を使って、その「わけ」を書けとあります。「わけ」を書くことは、どうしてそのような答えになったかという自分の思考、考え方をもう一度自分で反省をして、その道筋を自分でもう一度反すうすることであり、それこそメタ認知と言います。メタというのは、上から見るということです。先の全国学力・学習状況調査を見ると、小学校の算数の問題で「わけ」を書くことが求められると正答率が 20%を切ります。ですから、「わけ」を書くのは難しいです。しかし、このメタ認知の力が、これからの子どもたちにとって大切な能力として求められているのです。

それから、もう一つはクリティカルな知です。具体例として、資料2にあります、中学校3年生に出した問題をみてください。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を全部読ませて、その3問目に、この「蜘蛛の糸」の最後の場面はあった方が良いかどうかを問うています。この場面を中学生の中山さんはない方が良いと言い、木村さんはあった方が良いと言っています。それで、あなたはどちらに賛成しますか。その理由も書きなさいという問題です。実のところ、この出題は大きな反響をもたらしました。従来の日本の国語教育では、テキストに採用された文章を詳しく正確に深く読み取ることが求められていました。それなのに、この問題では、芥川龍之介という国民作家の作品の最後を取り上げて、あった方が良いかなかった方が良いのかと聞いています。そのために、このような問題は文学に対する冒涜だという怒りさえ生まれました。しかしながら、これこそがクリティカルな知です。確かにすばらしい小説で、間違いのないテキストや情報だと思っていても、本当にそうなのか、相対化してみる。信奉するだけでなく、ちょっと待てよ、それで良いのかという思考回路、このような様相がクリティカルと言われます。私たちは日々膨大な情報の中で生きていますので、21 世紀に生きる子どもたちにはそのような情報を吟味するクリティカルな知が求められているのです。実は、この「蜘蛛の糸」問題は、先ほどの PISA に出た問題を模倣したものです。

さらにもう一つ、学力の総合性というのがあります。これは、とくに総合的な学習において培かわれる力で、テーマ学習であり、大学でいうと卒業論文を書くことにあたります。私は学力の総合性というのは、メタ認知とかクリティカルな知とか表現する力というものをより活性化・総合化するためのものであり、とても大事な指導場面であると思います。最近は、総合的な学習が少し教育現場では後退してきているのではないか心配しています。時間の関係もありますので、ここでは、総合的な学習がきちんと位置づかないと、本当の意味でリテラシーが育たないということを指摘するにとどめたいと思います。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

蜘蛛の糸問題　　**資料 2**

三

お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしゃいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうなお顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、浅ましくおぼしめされたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着（注2）いたしません。その玉のような白い花は、お釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼（注3）を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何ともいえない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢れております。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。

（芥川龍之介「蜘蛛の糸」による。）

（注1）　蕊＝種子植物の生殖器官。おしべやめしべの総称。
（注2）　頓着＝深く心に掛けること。気にすること。
（注3）　萼＝花のがく。

三　中学生の中山さんと木村さんは、以前に読んだ「蜘蛛の糸」は、「三」の場面が省略されていたことを思い出しました。そして、次のような会話を交わしました。

中山さん	私はこの「三」はないほうがいいと思うな。
木村さん	いや、この作品には「三」があったほうがいいと思うよ。

あなたは、中山さん、木村さんのどちらの考えに賛成しますか。どちらか一人を選び、あなたが選んだ人の名前を解答用紙に書かれている書き出しの文の□に書きなさい。そのうえで、あなたがそのように考える理由を、次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1　書き出しの文に続けて書くこと。
条件2　本文中の表現や内容に触れること。
条件3　八十字以上、百二十字以内で書くこと。（解答用紙に書かれている書き出しの文の字数を含む。）

※左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

私は、□さんの考えに賛成します。

60

120

設問三

■正答について

(1)　次の三つの条件を満たして書いているものを正答とする。
・全体として筋道が通っている。
・本文中の表現や内容に触れて書いている。
・八〇字以上一二〇字以内で書いている。

(2)　「中山さん」と「木村さん」のどちらの考えに賛成してもよい。作品の表現や内容、構成等から明らかな根拠を挙げて、自分がどのように考えたのかを説明することができていれば正答とする。

■誤答について

文章の筋道が不明瞭であったり、自分が支持している立場とその説明との間に混乱や矛盾があったりするものは誤答とする。

H19 年度
全国学力・学習状況調査
中学校国語 B

75.5%

話を少し進めます。それでは、このような「豊かな学力」をどのように評価すればよいのでしょうか。実はこの評価の問題が教育にとってきわめて重要であることをお話します。今年度の NHK の大河ドラマは「平清盛」です。平安時代から鎌倉時代、貴族の時代から武士の時代に変わる時期を描こうとし

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ている、歴史的には重要なことを扱ったドラマです。学校でも、日本の先生は授業がとても上手ですので、平安時代と鎌倉時代の違いをいろいろな資料やビデオ教材を使って教えます。しかし、テストや試験をするとなると、鎌倉時代は何年に成立しましたか、鎌倉時代を作った人は誰ですか、三代の将軍の名前を挙げなさいというように、全部知識を聞いてしまう。そうすると、生徒たちには、この先生はとても面白い授業をしていたけれども、結局私たちに求めているのは、年代や人名を覚えることであって、そのことが大切なのだというメッセージが伝わってしまう。一方、先生にとっても、せっかく面白い授業をしたけれども、平安時代と鎌倉時代の違いをどのぐらい豊かに理解してくれたのかというのは、そのようなテストではわからないのです。授業と評価のミスマッチが続いていたのです。「豊かな学力」が求められようとしている今日、まさしくその「豊かさ」を捉える評価にメスをいれることで、教育方法の問題を考えることが大切になっているのです。

その中で最近注目されているのが、パフォーマンス評価とポートフォリオ評価です。そして、パフォーマンス評価とポートフォリオ評価の基礎になっているのが、「真正の評価（authentic　assessment）」という考え方です。「オーセンティック」とは、実際の場面（コンテキスト）を使って、子どもたちが本当にそのような力が付いているかどうかを確かめようとする評価のあり方を示しています。先ほどの平行四辺形でいうと、（３）の問題は地図という実際の場面の中で平行四辺形の面積を考えさせようとしていますので、そのレベルは高くありませんが、オーセンティックです。一方、（１）の問題は、考えてみますと、こんな問題は実際の生活の中で生じようもない、脱文脈化された課題となります。そして、このオーセンティックな考え方を一番典型的に示しているのがパフォーマンス評価であり、最近もっとも注目されているものです。

一つの例として資料３をご覧ください。これは井口先生が取り組んでおられるものです。小学校６年生が水溶液の性質を勉強する場面です。このような課題を与えます。「あなたは、『子ども科学者』です。『水溶液の性質って？』で学んだことをもとにして、次の３つのことについて『理科パンフレット』を作り、それを使って５年生に『地球の水を守ろう』ということについて説明してください。○水溶液の性質について。○お風呂洗剤などに「混ぜるな危険」とあるのはどういうことか。○地球の水を守るため、普段の生活で気をつけなければならないことはどんなことか。」これをパフォーマンス課題と言います。「真正の評価」の特徴は、授業と評価を截然と分けずに、パフォーマンス課題に取り組む中で評価が自然と取り組まれていることです。この場合は、「理科パンフレット」が評価対象となります。まとめて申しますと、「真正の評価」では、教師にとっては、子どもたちの「学び」の実相を深く診断するものであるとともに、それ自体が「学び」を活性化させる指導方法の一環となります。子どもたちは、その評価方法に参加するなかで、自らの「学び」を自己点検するとともに、より深く多層的な理解を得ることができるようになるのです。

ただ、ここで大きな問題が起こります。例えば皆さんが小学校の先生だとすると、このようなパフォーマンス課題を出題しますと、子どもたちはパンフレットを作成します。それでは、そのパンフレットを見た時にどれが一番よく書けているのか、また書けていないのかという、成績の基準を決めなければなりません。井口先生はどうされているか。井口先生の場合は評点を３・２・１として、このようなことが

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

書かれていたら、このパンフレットは評点２、これは評点３と基準を作っておられます。これをルーブリック（評価指標）と言います。それでは、この基準はどう作られたかというと、井口先生はベテランの先生ですから、今までの実践を振り返って作られています。別の方法として、同僚の先生が共同してルーブリックを作成される場合は、モデレーションといいます。このようにしてルーブリックを作ることがとても大切です。

パフォーマンス課題　　**資料 3**

－地球の水を守ろう－　　普段の生活で気をつけたいこと

あなたは，「子ども科学者」です。「水溶液の性質って？」で学んだことをもとにして，次の３つのことについて「理科パンフレット」を作り，それを使って５年生に「地球の水を守ろう」ということについて説明してください。

○　水溶液の性質について

○　お風呂洗剤などに「混ぜるな危険」とあるのはどういうことか。

○　地球の水を守るため，普段の生活で気をつけなければならないことはどんなことか。

ルーブリックの設定

評点	パフォーマンスの特徴
3	○水溶液の性質について，リトマス紙やＢＴＢ液によって酸性，アルカリ性，中性に分けられること，二酸化炭素など気体が溶けている水溶液や，塩酸など金属を変化させる水溶液があることをまとめている。 ○「混ぜるな危険」について，いろいろな水溶液を混ぜると有害なガスが出ることがあり危険だということや混ぜることによって性質が変わり水溶液の性質が変わることがあることなどについての考えをまとめている。 ○地球の水を守ることについて，家庭排水にも気をつけないと川や海を汚してしまうことがあることや温暖化傾向が続き二酸化炭素が多くなるとそれが海水に溶け性質が酸性となり海の生物にも影響が出ることなど水溶液の性質と環境とのかかわりについて自分の考えをまとめている。 ◎水溶液について伝える意識を持ち，分かりやすく説明をして，質問にもしっかりと受け答えしている。
2	○水溶液の性質について，酸性，アルカリ性，中性に分けられること，気体が溶けている水溶液や金属を溶かす水溶液があることをまとめている。 ○「混ぜるな危険」について，いろいろな洗剤を混ぜると有害なガスが出ることがあるから危険だという考えをまとめている。 ○地球の水を守ることについて，家庭排水にも十分に気をつけないと川や海を汚してしまうことがあることについて自分の考えをまとめている。 ◎水溶液の性質について，下級生に分かりやすく説明をしている。
1	○水溶液の性質について，酸性，アルカリ性などに分けられること，気体が溶けていたり金属を変化させたりする水溶液があることをまとめている。 ○「混ぜるな危険」「地球の水を守ること」について考えをまとめている。 ◎水溶液の性質についてまとめたことを読んで伝えている。

出典: 井口桂一「『水溶液の性質って?』でパフォーマンス課題をデザインする」田中耕治編著『パフォーマンス評価－思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい、2011 年所収

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

先ほど、「蜘蛛の糸」の問題を見ていただきました。パフォーマンス評価としてはレベルの高い問題です。ところが、その正答率は、75.5% と意外と高いのです。なぜ高い正答率なのかと言いますと、要は評価の基準が曖昧であり、甘いからだと思います。そして、採点した人たちが、学校の先生ではなく、一般の方であったことも影響しているでしょう。折角、良いパフォーマンス評価を実施しても、評価の基準が曖昧であると、その意義が半減してしまいます。この評価の基準としてのルーブリックを考えるということは、「豊かな学力」をすべての子どもたちに保障するために必要な課題なのです。

最後に申し上げたいのは、すでに指摘しましたように、現代は日本の学校教育が大きく変わろうとしている時期です。その時に、私が学校の先生に申し上げるのは、日本の学校の先生たちの教育をする力、また授業をする力は世界一であるということです。これは、営々として蓄積された日本の教師文化であり、今日グローバルなレベルで注目されています。ですから、新しいことがやってきた時に、今までやってきたことがすべて駄目だと思う必要は全くなく、このような新しい課題と今までの蓄積をどのように結び付けるのかを考えていけばよいということです。

ということで、「豊かな学力」を育む教育のあり方について、今考えていることをお話いたしました。

一色：田中先生ありがとうございました。日本の学校の先生は非常に優秀である。豊かな学力を保障するために、どのような基準を作っていくかが今ポイントになっていて、そのようなことができれば更に、先生方、子どもたちの学力が身に付くだろうというお話でした。では、次は山下先生にコメントをいただきたいと思います。

山下：皆さん、こんにちは。私は、違う立場で、教育制度研究の立場でコメントをしてくださいということでした。十分にできるかどうかわかりませんが、お渡ししているプリントがあります。これをすべてお話すると時間がかかりますので、掻い摘んでお話させていただきます。田中先生がお話されたことに関連して、教育制度から見る大事なことを2つお話します。

一つ目は、田中先生のお話の中で、評価することがとても大切であるとおっしゃっていましたが、今、本当にそのことが大事になってきています。教育制度の立場から加えて申し上げると、田中先生のお話にもありましたが、日本で評価というと、今までは子どものことを評価していた。今も子どもの学力を評価するのは、間違いはないのですが、何のために評価をするのかというと、教える側がいい教え方をするように、そのために評価をするという考え方に変わってきました。これがパフォーマンス評価とワンセットになっているということです。これがとても大事です。皆さんの中にも、将来の進路として子どもの世話をしたり、子どもの面倒を見たりする仕事に就きたいという人がいると思うのですが、今は教える人だけではなくて、子どもの面倒を見る人、世話をする人、皆、評価されています。これがとても大事なことです。例えば、今まで百点満点のテストで 20 点や 30 点を取ったことありますか。続けて取ると慣れますが、初めて取った時の衝撃は忘れられません。ガーンと思い、また親にひどく怒られるわけです。一生懸命頑張ったつもりだけれども自分が悪かったと思うのです。その時に大体の親御さんが、「もっとがんばりなさい」「もっと勉強しなさい」と言いますが、先生の教え方が悪いという人はあまりい

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

なかった。逆もまた真なりで、百点取ってきて、偉いと言ってご褒美を買ってくれることがあっても、今度の先生は教え方が上手だと言うことは殆どなかった。それが、教える側をきちんと評価しようという仕組みを少しずつ学校の中に取り入れるようになっています。これが、1ページ目の2つ目の二重丸になります。

学校評価、教員評価という言葉です。この言葉を聞いたことがある人挙手してください。あまりいませんね。今、幼稚園でも保育園でも、このような評価をしています。この前幼稚園の先生にお話を聞くと、300 項目評価をしていて、評価だけで一週間かかるとおっしゃっていました。いずれにしても現場に出ればいろいろと見えてくるのですが、そのようなことをしています。ところが、中々この評価がうまくいかないのです。教える側を評価するというと、今、モンスターペアレントという言葉に出てくるように、とにかく何かがあったら文句をつけることが評価だと思っていたり、学校の先生を攻撃したり批判したら評価だと思っている。そうではなくて、あの先生はよくやってくれたとかあの先生は頑張ってくれているという言葉が、なかなかその先生に届きにくい。このような前向きな言葉なども評価の中に入れて、どうやって届けていくかが、今、大事な課題になっています。

他にもいくつかあります。田中先生のお話の中で学力が本当に変わりつつあるのだと思いました。全国学力調査で「蜘蛛の糸」の最後の場面があった方がいいか、なかった方がいいかと出題されたら、書きようがないですね。どちらでもいいというのは駄目なのでしょうか。そのような力が求められている。そういう意味では、日本の学力も変わってきていると思います。皆さんはゆとり教育を受けて損したと思っている方もいるかもしれません。でも、ゆとり教育と呼ばれていた時から、実は豊かな学力を育てていこうという考え方だったので、皆さん自信を持ってください。でも、これがまた難しい問題を生んでいます。今、学力がどのような世の中の流れで注目されるかというと、そこにありますように、経済のグローバル化とか国際経済競争などで注目されて、日本のこれからの景気、経済のことを考えたら、優秀な人材が必要である。いろいろと考えたり、発信できる、それを相手に伝えられる学力を目指しているようです。ところがこの前、大阪でシンポジウムがあって、そこで、最後に聴講していた女性の方が「私は大阪のおかんです。今、人材育成と言っていますが、ウチの子どもは材料ではない。ウチの子どもは日本の景気を立て直すために生まれてきたり、勉強したりしているわけではない。それをなぜ、こんなに人材というのだ」と発言されました。私のような教育学者は、つい世の中のための人材育成、そのための学力と考えてしまいますが、そうではなくて、子ども一人ひとりにきちんと生き方・人生があるし、そこで生きていくための力が必要であろうと思います。ですから、先ほどの「蜘蛛の糸」の問題や平行四辺形の問題も、国際社会を生き抜くためには必要ですが、それを無理矢理子どもたちにやらせるとなると、少し具合が悪いのではないかと思います。そう考えるとこの問題は、とても難しいです。実は、このことは、学校の先生たちに任せておくだけでは駄目で、大人一人ひとりも、皆さんのような大人と子どもの段階の狭間の方も、これは答えのない問題なので、大人の方が学力って何だろう、学ぶというのは何だろうと、もう一度考えなければならない時代になっているようです。

2ページ目の上から3つ目のところに書きましたが、皆さんは親御さんに尋ねたことがあると思いますが、「なぜ、勉強をしなければならないのか」「なぜ、学校に行かなければいけないのか」。そう言って

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

いる段階で勉強をしたくない、学校に行きたくないと言ってるわけですが、そのような勉強、学校が広まっています。それを変えようとしているわけです。でも、なぜ勉強をしなければならないのかという質問に対して、どんな答えが返ってきたでしょうか。ルールをきちんと説明して、納得して勉強するような返事が返ってきたでしょうか。私の見聞きするところでは、このような疑問を投げかけたことはありますが、「何を聞いているのだ、そんなことを聞く暇があるなら、さっさと勉強しろ」と言われました。全く答えてはもらえませんでした。大体、大人が今まで思っていたのは、いい学校に行って、いい会社に入って、いい人生を送る。経済的に豊かなという意味を込めた、精々その程度のことしか言えなかったのです。でも、そのような勉強をしてきた結果が、例えば自分さえよければいい。自分だけ点数を取っていればいい、他の人は関係がないというような学力を身に付けてきてしまったのかも知れません。でも、田中先生にご紹介いただいたような学力は、自分はこのように考えた、だからこのように書きました。相手に伝えるためのメッセージ、それをどうやって作っていくかという学力。これは、人を切り離す学力ではなくて、人と人を繋げる学力、絆の学力を今の日本は取り戻そうとしています。でもそれがどうすればできるのかは、誰にもわからない。だから、改めて学力は、私たちにとって、社会全体にとって、どんな意味を持つのか、どういう意味を持たせたいかを考えるような仕組みが、教育制度の立場からは必要だと思われます。プリントの下に書きましたが、教育制度というと、どんな制度の中で勉強をしようか、どんな制度の中で教えるかということが議論になりますが、それに加えて、では、その教育をどのようにして動かしていくのかも考える、第三の制度が教育制度には必要なのではないかと思っています。少し漠然としたお話をして恐縮ですが、私のコメントは以上です。ありがとうございました。

一色：山下先生、どうもありがとうございました。第一部の最後に一つだけ伺いたいのですが、日本の学校の先生は力量があってという、とてもポジティブなお話をいただきました。そのために新しい教育要領の中で大切なのは、学力を保障するための基準作りということで、それをもう一つ広い社会に転換していくと、今、山下先生がおっしゃったように、学力とか学校は、本来子どもにとってどういうことなのかというところまで遡ることができると思います。それで、山下先生は、ご自身のホームページなどで、学校は本来、知識や技術の習得のみならず、友人や教師など、同世代異世代多様な人々との出会いを通じて子どもたちの豊かな成長を保障する場であると共に、地域社会との連携までを視野に入れた教育制度を考えていらっしゃるということなので、その辺りをもう少し具体的にお話いただけますでしょうか。

山下：私が思っていることは、本当に単純なことで、教育とか子どもが話題になると、地域の人たちも仲良くしてくれることが多いです。他のところではいがみ合っていたりしても、子どもとなると、ワンクッション置いて考えてくれていて、ある程度皆が仲良くしてもらえるチャンスがあるのかなと思います。そういう意味では、学校づくりが町づくりに繋がっていくというのが、あくまでも理想ではあります。私がそのようなことをいうと、そんな人々が仲良く話などできるわけがない、人々が話をしたら、すぐに喧嘩になるから、話さなくてもいいというご意見もあって、それもそうだと思い今、迷っている最中ではあります

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

が、そのような感じで、皆が集まって、子どものことを考えて、学校のことを考えて、それが未来の町づくりのことを考えるきっかけになればと思っています。

一色：ありがとうございました。今３年生の学生が中心に、お話を伺っており、将来、小学校、幼稚園、保育園で働くわけですが、今日のお話のポイントとして、そのような学生たちに何を望みますか。

山下：一言では難しいかも知れないのですが、21 世紀に入って 10 年間経ちましたけれども、かなり新しいことが入ってきたように思います。我々がそれをどのように見極めて、きちんと自分の主張、自分の考えをどのように持つのかが、ますます問われる時代になってきていると思っています。このレジュメの中には、例えば根拠と理由と主張をきちんとメリハリをつけて言うことが大切だと書かれていますが、これは、クリティカルな考え方です。つまり自分が何を考えている、それはどのような理由で考えているというのは、今までの日本社会においては、あまり言わなかったし、そのようなことを言う人は理屈っぽい人で嫌われる対象と思われていたのですが、実は、そういうことが今求められてきていると一方では思います。でも、それだけやっていればいいかというと、そうではなくて、日本の文化の中で大切にしてきた、人と人とを繋ぐための会話をどうしたらいいか、田中先生が、先ほど絆の力とおっしゃいましたが、これは話し合い文化であるとか寄り合い文化と言われているのですが、そういう文化をとても大切にしてきました。それを大切にしつつ、でも新しい課題として、きちんと自分の考え方を相手に伝える。あの人と少し違うのだという時に違いがどこにあるのかということをきちんと言える、そのような力がこれからは必要になってきていて、これは、日本だけではなくて、アジアの国々がそのことを一生懸命考えてきている。多分、皆さん方は、これからグローバルな世界にいて、いろいろな人と出会うと思いますが、その中でもアジアの人との出会いがたくさんあると思いますので、その人たちともきちんと向かって考え方をお互いに交流できて、そして、深い絆が持てるような力を持って欲しいし、そのような子どもたちを育てて欲しいと思います。

一色：ありがとうございました。では、学生の方で、何か質問、コメント、感想などありますでしょうか。

西尾：総合子ども学科の西尾です。山下先生とは大学時代の同級生で、また、田中先生の授業も受けておりました。私の３年ゼミで、自分が理想とする保育、或いはどんな人を育てたいと思っているのか、そのためにはどうしたらいいのかということを２週に渡って話し合っていました。そういう訓練、そういう場を通して、最後に私が伝えたのは、自分が育てたいと思う、このような人になって欲しいという願いとそれを実現するための保育、そして、それを言語化することがとても大事である。またそれを誰かに説明していくということが、これから保護者であったり、自分の同僚に対して、その情報発信が非常に大事になると思っているということを伝えました。今、先生の最後のお話を伺って、話をしておいてよかった思い、そのことを学生たちが、今日の先生のお話と結びつけて考えてくれていたらうれしいと思っておりました。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

一色：今、西尾先生がまとめのようなお話をしてくださいました。西尾先生のゼミの学生で誰かいますか。

学生Ａ：今日はどうもありがとうございました。ゼミの授業で自分がどのような子どもを育てたいかという話を伺っていたので、今日の内容にもありましたが、教員や大人がこのような子どもに育てたいという願いがあって、学習指導要領も作られていると改めて感じました。

一色：では、学生の皆さんは、これを機にしっかりと自分の考えをきちんと身に付けてください。第一部はこれで終了いたします。

【休憩】

一色：第二部を始めます。今日は非常に内容が濃く、お二人の先生もこれだけは話したいということがあるかもしれませんので、伺いたいと思います。その後、皆様とディスカッションしたいと思います。

田中：今日は学生の皆さんが聞いてくれているということもあって、学習指導要領が変わり、教科書が変わり、その中に現れてきている新しい学力の姿がこうだという筋道で話を進めました。そこで、少し省略したことは、「真正の評価」には「質」と「参加」という二つの原理があるということです。PISAの持っているリテラシーのインパクトは、この「質」に関わることです。一方、「参加」とは、教育に関わる人たちが自己決定することを重視することです。その「参加」が、今の日本の教育制度の中でどの程度保障されているのかということを考えていかなければいけないと思います。そうすると、教育方法という狭い世界ではなくて、山下先生がご指摘されているように教育行政という大きな世界を問うことになります。

一色：ありがとうございました。短い時間で申し訳ございませんでした。山下先生、何かございますか。

山下：私も書いてきたことはたくさんあるのですが、大体言いたいことは言えたかと思います。先ほど、田中先生がおっしゃった参加の問題は、確かに大事な問題です。いろいろな筋道で考えられるのですが、いくら子どもたちに高度な学力、豊かな学力を身に付けようとしても、実は教師の方がそれに対応できるかどうかとなると、自分も含めて自信がない。ですから学校の先生が自信喪失気味です。責めるような目で見れば、そのぐらい勉強すればいいとなりますが、これはかなり高度なことを要求していますし、それまでの先生の人生を否定するわけにもいかないので、ソフトランディングでいく方法がないかと考えているところです。更に考えなければいけないことがあります。先ほどもモンスターペアレンツという言葉を出しましたが、一応私の所属する研究会はモンスターペアレンツのことを研究している研究会ではありますが、その言葉を使わないようにしようとしています。モンスターといった時点で対話の相手でな

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

くなってしまうのはよくないので、学校と保護者、もしくは教師と保護者の関係として考えるようにしています。そういう中で教育が変わり始めたのと時を同じくして、学校と家庭の関係、先生と保護者の関係もとても難しい時代になってきていると思っています。しかし、学校の先生というのは、なぜ教師をしているかというと、子どもの成長について、親から委託を受けて、或いは、社会からお願いされて、たまたま肩代わりしてやっているに過ぎない。このようなことをもう一度考え直してみなければならないのではないか。そうすると、先生を責めるのは簡単なのですが、教師は、日本全体が持っている教育力の氷山の一角であって、氷山の隠れた部分には、私たち一人ひとりが持っている教育力があるはずです。ところが、そのことを不問に付したまま、教師がなっていないと責める。かなりがんばっている部分はあるように思います。ところがそのがんばりは地域の人や親御さんには、見えていないということがあって、疑心暗鬼になってしまっていると思います。その疑心暗鬼を解いていくためには、一体どのような考え方を一人ひとりがしなければならないのか、どんなつながり方をしなければならないのか。そういう土台があって、初めて学力というものも生き生きしてくると思っています。私も学力の研究がとても好きで、教育方法にも興味があるのですが、今のような研究をしているのは、その土台作りが少し痩せ衰えているような気がしているからです。神戸に来てからも、うまくいっている学校もあれば、そうでない学校もありますので、難しいのかという気がします。でも難しいからこそ研究するやりがいが生まれるので、我々にとって悪いことではないのですが、そういったことを付け加えればと思います。

一色：どうもありがとうございました。それでは、ここからはディスカッションということで、何かご質問、コメントはございますか。

一般Ａ：今日は興味深いお話をどうもありがとうございました。田中先生のお話に関してですが、先生は評価のご専門ということで、先日、取材で東京大学の三宅なほみ先生のところに伺い、知識構成型ジグソー法のお話を伺ったのですが、先生は、日本の教師は授業が上手だとおっしゃいましたが、評価の方が表現力などの評価をしていくのであれば、授業の方もそれに合わせた表現力を身に付けるような授業スタイルにしないといくら日本の教師は授業が上手くても、授業が旧来のままであると知識を受け取るだけになってしまって、表現を練習する場が全くないのではないかと思ったのですが、その辺り、先生のお話を伺いたいと思います。

山下先生は、学校づくりが町づくりになればいいとおっしゃっていたのですが、アメリカの学校などでは、校長の権限が強くて、実際に保護者が集まって校長と色々と話をして学校をこうしていこうというようなことをしていると聞いたことがあります。それから私立中学の取材などにも行くのですが、うまくいっている学校というのは、現場の先生の権限が強いというか、現場の先生方が自分たちで学校を運営しているようなスタイルになっていると思います。日本の公立の学校というのは、どうしても上からああだこうだと押さえつけられるところがあるのではないかと思いますが、その辺りのご意見を伺いたいと思います。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

田中：とても重要なことをご指摘いただきました。一つは、日本の先生たちの授業研究のレベルは高いと申しましたが、そこには、２つぐらい留保しなければならないところがあると思います。一つは、レベルの高かった授業研究が、団塊の世代の先生方がお辞めになっている中で、うまく継承されているのかということです。一研究者としては、過去の優れた実践事例を理論化しながら、その成果の一端を伝えようと努力しています。ただやはり、全体としての教師教育をどのようにうまく構築するのかを考えなくてはなりません。もうひとつ留保しておきたいのは、日本の教師たちは授業の研究はよくやるのですが、評価をどう考えるかということになると弱いのです。その弱さの原因は、指導要録で半世紀余り相対評価を採用してきたからだと思います。したがって、評価とは子どもたちに順位をつけることだと考えられてきました。このような状況のなかでは、評価にメスを入れることによって授業を変えようとする意識が育ちにくいのです。このような状況に対して、PISA がクリティカルな知をあぶりだすようなパフォーマンス問題を提案することで、日本の教師たちの評価リテラシーを高める一つのチャンスを与えたと考えてよいでしょう。

山下：十分にお答えできるかどうかわかりませんが、おっしゃる通り、学校の方がやる気さえあれば、いくらでも盛り上げて地域の人たちを巻き込んで一緒にやっていくことはできると思います。法的な権限関係の中では、ほぼ問題がないのです。ですから、学校がいくらでもやろうとしたらできる仕組みは整っているはずなのです。少なくともその前提条件はありますし、それを邪魔するものは案外と少ないはずなのですが、でもしない。これは、やっている場合とやらない場合、両方を考えないといけないのですが、やっている場合は、保護者が地域と繋がっていないといけないという強い思いがあるので、やるわけです。その強い思いが何であるのかは、調べてみないとわかりませんが、学校の先生は、子どもに向き合うことは大事なのですが、その子どもに何をどのように伝えるかということを考えると、当の子どもが何を期待しているのか、子どもの保護者は何を期待しているのか、地域は何を期待しているのかというものを背負わないと逆に教えられないという側面がある。あるいは、そういう期待の裏返しとして、今度自分たちのことをある程度認めてもらっているという気持ちがないと、自信を持って子どもたちに接することができない。端的にいうと、いくら学校でああだこうだ勉強のやり方を言っても、家に帰って「あの先生は大した力はないので、先生の言うことを聞かなくていい」と一言、親に言われただけで、もろく崩れていくようなところがある。学校と家庭なり地域、教師と保護者なり地域の住民の関係は、結構壊れやすい、丁寧に扱わないといけないのですが、そのことがあまり全体の常識になっていない。理解されていないというか、理解する必要もないのかもしれませんが、共有されてなくて、当の教員ですら、それは必要ないという人がいる。私は、今のこの世の中で、これでは限界があるのではないかという思いです。それが本当に普遍的にいえるのかはよくわかりませんが、でも学校の先生の中には、同じようにおっしゃる方もいて、例えば、学校の中だけで教育するのは限界だというのも一つのその言い方です。学校が家庭や地域と結びついて一緒にやっていくのは、教育の本質に適っているので恐らくはうまくいくし、そういったことをしなければならない。難しい出来事に巻き込まれた先生や、やってみれば結構面白かったという味を占めた先生など、必要性を感じたり、本当にこれはいいことだと親身に

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

実感した先生が、例えば校長先生になられたり、学校を引っ張っていく立場になられた時には、積極的にそのようなことをされたりすることがあると思います。反面、進んでいないという場合には、そんなことを感じる経験も今までなかったのか、もしくは私がそう思っているだけで、教師にそのような結びつきが必要ない、というのが本来の姿なのかもしれませんが、もし、そうであれば、私の仮説は間違っているのですが、そのような味を占める経験とか必要性は感じてこなかったし、そのような人が校長先生になると、これは日本の人事異動制度にもかなり難しいところがあって、例えば２～３年で校長先生が変わってしまうことになっているので、腰を落ち着けて学校づくりができない。そうすると２～３年をつつがなく過ごせばいいとなる。更には、地域の方には一定の条件が整っていないと難しい面がある。

例えば、公立の中学校ですと、やはりいろいろな形でエネルギーが有り余っている子どもたちを抱えているので、地域にいいこともたくさんしていますが、面倒もかけている、これはかなり目立ちますし、「ありがとう」という言葉よりも、「何だ、あの学校」という言葉の方が遥かに高く聞こえてくる。そういった中で地域といい関係がないのだから、今の段階で地域と保護者と結びつこうといっても難しいだろうということを思われて、そのようなことを打って出るのはできないという先生もいらして、どうしても引っ込まれているところもあると思います。ですから、現行法制の下では、学校というのは、かなりの幅を持って、むしろ今は地域の結びつきが奨励されているので、文部科学省も諸手を挙げていますし、神戸市なども積極的に推し進めているので、やらないところはもう一歩踏み出せる部分もあるかもしれないと思います。但し、これは難しい問題を生み出します。学校側に都合のよいことばかりを求めて、保護者が地域の方に手伝ってもらうような形で接している部分があると、地域や保護者の方も反発を持たれるでしょう。個々の学校によって条件は違うとは思います。ですが、やる気さえあれば開けるし、多分開いた方が、教育には適っているのではないかと思います。

一色：ありがとうございました。他にいらっしゃいますか。

一般Ｂ：今、子育て中です。アメリカの教育大学院で英語教授法を専攻しておりました。そのことを思い出すと、どんなことをしたらこの授業が皆のために役に立つのかということを踏まえた上で先生方のアセスメントをしたのを思い出します。アメリカで教育学を専攻したこともあって、勉強というのは、大なり小なり世の中を変えるためにするものだというのが私の持論です。去年の大震災の際は、社会全体のことを子どもがいることもあり、深く考える時間がありました。その時にこれから子どもたちをどう育てていくか、どのような人間になって欲しいかということを考えた時に今までの受け身型の人間では、日本社会が衰退していると言われている中で、皆が共倒れになってしまわないかという心配があり、これからどのような人間が必要になってくるかというと、アフリカではチーター世代という人たちが活躍しているという話を聞いたことがあるのですが、自分たちが社会全体を変えていくという意思を持つ若者が増えていくことが必要になると思います。自分たちが主体であるという考え方が必要になってくると思いますが、そのような教育風土を培うためには、私たちの世代というのは、どのように考えて子どもたちに接していけばいいのでしょうか。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

田中：既にご回答を出していただいているようですが、先ほどの私の話で、クリティカルに考える力が求められているのではないかということを申し上げました。どうも日本の今までの教育は、そういうものに踏み込まない、踏み込んではいけないという風土がありました。しかしながら、3.11 以降の原発問題によって、それに関係する情報をいかに読み取っていくのかが問われています。つまり、メディア・リテラシーの力です。今度の PISA の問題のなかに、あるレポーターが提出した資料とその説明について当否を問うという課題があります。その解答は、レポーターが都合の良いグラフを使って主張しているので間違いというものです。いわば、主張していることと、事実であることを区別して見極めるような力が、学校教育においても家庭教育においても必要だと思います。

もうひとつ申し上げますと、山下先生が地域と学校の環境というパースペクティブの重要性を指摘されましたが、評価論の問題としては、やはり大学入試や高校入試の問題に直面します。実のところ、そこが変わらないと、「豊かな学力」が掛け声に終わる危険があります。東京大学は9月入試と主張されていますが、京大の総長は入試それ自体を変えなければならないとおっしゃっています。私の理想では、大学入試にパフォーマンス評価やポートフォリオ評価を入れることで、子どもたちは総合的な学習とか課題学習に積極的に取り組んでいくであろうと考えています。まさしく、授業の中での評価のあり方を考えると同時に、制度としての評価の問題、特に入試の問題をどう考えるかというのが大きな課題であると思っています。

山下：今、最後に田中先生がおっしゃったことは、本当にその通りだと思います。教育研究者というより、大学に勤めて若い学生と向き合っている立場としての視点なのですが、今の学生を見ていると、いい面も目につきますが、もう少しこうすればいいのに、なぜこうなのだろうと思うことも多くあります。例えば、「テストでいい点数を取ってきたからそれでいいでしょう。それ以上何が必要なのか」という雰囲気があります。だから話に深みが出なくて、学ぶ意欲も感じられない。

でも、実際そのような子どもをどんどん生み出しているのは私達である可能性はあって、これは由々しき事態だと痛感しています。けれども、これも反面の話で、本当に気付いている人もいて、そういう人は、大学を出て活躍しているので、我々は会う機会が少ないです。難しい問題で、先ほども言いましたように、90 点を取るとか高い偏差値を取るとか、いい大学に行くのがあなたの使命だ、仕事だ、という 18 年間を過ごして大学にきているので、それ以外のことをあまり知らない。だから生き方を知らなかったという気の毒な面、被害者の面もあります。そう考えると非常に難しい話です。

ご質問にお答えすると、これからの世の中を変えていくような若い世代を育てていくのは、我々の課題だと思います。私は、そのようなことを考えて今の仕事をしているので、大賛成ですが、最近、ふと立ち止まる機会がありました。それはとても基本で大事なことではあるけれども、少し付け加えて考えなければならないことがある。例えば、あまりにも、そのようなことを急ぎすぎて、「劇薬」によって社会を変えていこうとする世の中の風潮もある。社会科学者としては、その実験を見てみたいのですが、それに伴う損害が尋常ではなさそうなので、それは倫理的には許されない社会実験かもしれないと思っ

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ています。劇薬が必要だという人もいますが、ある程度、生活基盤が整っている人にとっては、劇薬もしかたがないと言えるかもしれませんが、その劇薬で人生が本当に台無しにされるかもしれない中でそれはしてはいけないところもあって、世の中全体が急ぎ過ぎているかなと感じます。

その点で３つほど、立ち止まって考えたいと思っています。一つは、世の中を変える主体と言った時に変えていく方向性とか中身を、「主体にする、しない」という２択ではなくて、どういう主体なのかこそ、かなり丁寧に吟味した方がいいかと思います。二つ目に、震災以降、何か変えなければという私自身焦りもあります。世の中がそうなって欲しいという願望があることは望ましいですし、夢や理想として持つことは、本当にいいことです。同時に、あまり行き過ぎて、社会、世の中がそんなに一気に変わるものだと思ってしまうと、行き過ぎた操作主義みたいな危険性もあるかと思っています。現実は、多面体なので、そのような気持ちがないよりはあった方がいいと思いますし、一人ひとりがいい世の中になったらいいなという気持ちがあるとないとでは違うので、あるに越したことはないのですが、その持ち方については、どんな水準で持つのかというのも立ち止まって考えないといけない。そして三つ目に、私たちは、もっと世の中が良くなるようにと、若い人たちに力をつけてと接しているのですが、若者の雰囲気がそうではない。先ほどは、若者が自分にしか興味がないという文脈の話をしました。去年『絶望の国の幸福な若者たち』という本があったのですが、そこには若い人がこう書いてありました。「僕らは、そんなに大して世の中を変えようなんて思っていない。変えられたとしてもそれは、カンボジアとか遠い国のことは変えられることはできるかもしれないけど、今生きている世の中にもそんなに不満はないし、変えようとは思っていない」というのです。一種、若い人たちから我々の世代に対しての挑戦状の側面もあって、このような若者を目の前に、かつ彼らの生き方は彼らが選びとるという問題ですから、我々はどのようにアプローチできるのかということを考えています。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般Ｃ：評価という点で、新しい潮流ができたとのことでしたが、評価の中に教える側の視点が変わってくるということだと思うのですが、その評価の対象の中に子どもたちの評価は自分がどれだけ伸びたかという項目などはあるのですか。

田中：現在、評価論の中で主張されていることは、形成的評価と子どもたちが行う自己評価をどのようにして結びつけていくのかということです。先ほどの話の最後にルーブリックについてお話しました。そこで大切なことは、そのルーブリックを子どもたちに示すことによって、あなたは２をもらったけれども３にするにはどのような努力が必要なのか、３はこのような力を求めていますということをきちんと示します。つまり、自己評価をさせるための指針ともなるのです。今おっしゃったように、まさに子どもたちの評価に結び付かない評価はだめだということなのかもしれません。

一色：他にいらっしゃいますか。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

一般 A：PISA が紙ベースのテストをあと 2･3 回で止めると聞いたのですが、ご意見などございますか。

田中：確かに PISA のリテラシーそのものを変革していくことが語られ始めています。今日の話でいうと、学力のモデルを作りかえることで、そのモデルにふさわしい評価の方法をどうするのかという課題です。今までの PISA は、紙と鉛筆でやるものであり、パフォーマンス評価も明らかに紙と鉛筆の世界に閉じられています。しかし、それでは評価方法には限界があります。例えば、実際の生活の中で身に付けたことが活かされているかとなると、そのようなオーセンティックな場面を設定しないといけません。その一つが、井口先生の授業にありましたように、パンフレットを作るという課題であり、学習したことを総合的に理解できているかどうかを示そうとしています。こうなると、明らかに同じ場所で1時間、２時間をという制限時間内で行うテストには馴染みません。そうすると PISA の調査方法も変えざるを得ないと思うのですが、国際学力テストという性格と、規模の大きなテストですので、紙と鉛筆を外すのは、限りなく難しいでしょう。したがって、ここで注意したい点は PISA の目指しているリテラシーと実際に PISA が問題としてどのような内容や形式で出題しているのかを区別して考えた方がいいということです。ですから実際に活用する力となると、実演させるとか、ドラマ化して取り組ませるなどして評価の場面をどう作るかということになるので、PISA が果たしてできるかどうかはわかりません。

一色：よろしいでしょうか。

学生 B：総合子ども学科の４年生です。今、私は小学校の教員になるため、教員採用試験の勉強をしていますが、私たちが教員になる前に何をするべきかを教えていただけますか。

山下：教師を目指している学生がいて、「国語も好き、理科も音楽も好き、体育も好き、ピアノも弾けるので、教師になれますよね」と言われて、なんてわかりやすい人だろうと思いました。私が返した言葉は、「私が採用試験の側だったら落とすかもしれない。君の成績がいいのは、わかったけれども、その優秀さを子どもたちにどう使ってくれるかという話が出ないので、君は君しか興味がない人間にしか見えない」ということでした。

今、何をなすべきかわかりませんが、子どもたちのために自分の力をどのように使えるのかというのをきちんと考えることです。そうすると子どもたちがどういう状況に置かれていて、どんな力の芽を持っていてその力の芽にどんな肥料と水と日光を与えればすくすく育つのか、そのために自分は何ができるかを考えるということでしょうか。試験を受けるとなると皆さんの力を試されているので、どうしても自分の力を高めるということを考えますが、教師の最大の仕事は自分の仕事を高めることではなくて、子どもの力を高めることなので、そのために何ができるのかと考えると、何かが見えてくるのではないかと思います。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

一色：今日のテーマ「豊かな学力を育む教育のあり方」にとても関心を持っておりました。自分としては人間が人間として生きていくための豊かな学力、それを一人ひとりが身に付けていく、そのための教育であろうと思っていました。そういうことでいうと、今日、お二人の先生からいろいろなお話を伺って、なるほどと思いました。その中で、日本は今でも、私から見ると、ものづくりの能力もあり、零細企業が世界に通じるところがあり、表現力とか判断力が生産現場では生かされていると感じました。人づくり、先ほど、山下先生がおっしゃった絆の学力もうまく培っていくようなことができるのではないかと前向きに考えました。どうもありがとうございました。

Copyright (c) 2013,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.